元豊八年（一〇八五）五十歳　五月、常州にいて作る。
杜甫の「両個の黄鸝翠柳に鳴く」の絶句と同様、起承、転結ともに対句になっている。

溪陰堂

白水滿時雙鷺下　　白水 満つる時 双鷺 下り
綠槐高處一蟬吟　　緑槐 高き処 一蟬吟ず
酒醒門外三竿日　　酒は醒む 門外 三竿の日
臥看溪南十畝陰　　臥して看る溪南 十畝の陰

【語釈】
○溪陰堂…不詳※　白水　李白の詩に「青山北郭に横はり、白水東城を遶る」○白水・緑槐…潘岳の詩に「白水庭を過りて激し、緑槐門を夾んで植う」○一蟬吟…能改齋漫録（巻八）に東坡のもとづく所として唐の李端の詩を引く、「水を隔てて一蟬鳴く」○三竿日…竿三本つないだ高さの太陽。朝寝ぼうしたこと。晋書天文志に「日出で高さ三竿のとき、朱色赤黄日暈あり」○十畝陰…白居易の池上閑吟に「荘に非ず宅に非ず蘭若に非ず、竹樹　池亭　十畝」

※[査慎行註]高齋詩話に云う。東坡の「真州の范氏の溪堂を過ぎる」詩なり。蓋し老杜の「両箇黄鸝鳴翠柳」の一首を用いる詩意也。此れに拠れば則ち溪陰堂 は当に真州（真州＝江南 揚州府 儀真県）に在り。[誥案]此れ名作也。李に足(すぐ)れり、杜に斉しく駆せる。

清・王文誥 輯注の「蘇軾詩集」より抄出

【通釈】
すみきった水をたたえた溪流に、二羽のさぎがまいおり、緑したたるばかりの槐の樹の梢に、一匹の蟬が鳴いている。酔いがさめてみると、外にはもう竹ざお三本ほどつないだ先のあたりに日がかかっている。よこになったまま溪流の南の十畝ばかりのこかげを、わたしはいましずかにながめている。

蘇東坡　近藤光男より抄出

《参考》
絶句　　杜甫
兩箇黄鸝鳴翠柳　　両箇の 黄鸝 翠柳に鳴き
一行白鷺上青天　　一行の 白鷺 青天に上る
窓含西嶺千秋雪　　窓には含む 西嶺 千秋の雪
門泊東吳萬里船　　門には泊す 東呉 万里の船